

越中八尾おわら歌碑 《いにしへの文化人との交流》

八尾駅前郵便局前(20/26)



飛驒へぬけよか

富山へゆこか

八尾よいとこ

オワラ水の音

室積徂春

室積徂春(むろづみ そしゅん)
徂春は号。旧姓は増永、本名は尚たかし。別号に別号に碌々子、平明居主人、碌二道人など。日本の俳人。滋賀県大津市生まれ。十三歳から俳句をはじめ、正岡子規に入門。岡野知十にも学ぶ。一九一四年に婿入りし室積姓となる。佐藤紅緑の「とくさ」を編集。子規亡き後、高浜虚子門下としてホトトギス派の有力俳人となる。一九二七年に自らの結社「ゆく春」を主宰、墓所は東京都品川为天妙国寺。



福島の湯前(21/26)



ぽんと出た

別荘山から出たでた月が

おわら踊りに

オワラうかれ出た

小川千甕

小杉放菴(こすぎほうあん)

~Vol.1に掲載~

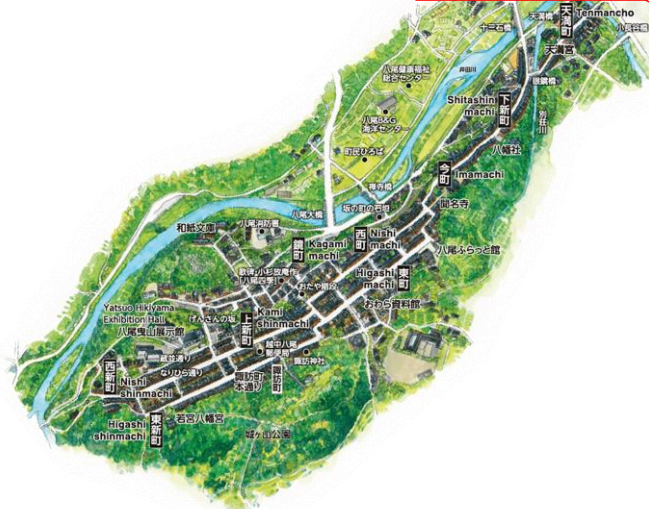




八尾園前



福島湯前※



八尾園前 (22/26)

小杉放菴 (こすぎほうあん)
Vol. 1 に掲載

富山あたりか
あの燈火は
飛んでゆきたや
オワラ灯とり虫
小杉放菴

【補足】「虫」の姿に心を映す唄

越中八尾の「おわら風の盆」で唄われる「八尾四季の唄（夏）」には、「灯とり虫（火取り虫）」が登場します。

万葉集の時代には、主に「夏虫」がその役割を担っていました。灯火に飛び込んで自ら命を落とす虫（蛾など）を指すのが一般的で、「何かに取り憑かれたように光を追い求め、自滅していく存在」として描かれています。自身の情熱や孤独を投影した歌が多いのが特徴です。

「灯とり虫」という呼び方は、江戸時代頃から季語として広く使われるようになった比較的新しいものですが、「光に身を投じる虫に、自らの心の内を重ねる」という日本人の感性は万葉集の時代から脈々と受け継がれてきたと言えるでしょう。

「灯とり虫」は絵画の世界でも登場します。『速水御舟（はやみぎよしゅう）』が描いた『炎舞（えんぶ）』という絵画は、暗闇の中で燃え盛る炎に誘われた蛾が幻想的に飛び回る様を描いた作品であり、一九七七年には御舟を代表する作品として重要文化財に指定されました。

唄に登場する「虫」は他にもあり、それぞれ次のような心情が込められていると言われています。

《例》

蝶

..春の蝶は「のどかさ」や「華やかさ」を、
冬が近づくにつれ「厳しさ」や「孤独」を象徴します。

秋の虫..深まる秋の「孤独」や、独り寝の「寂しさ」を表します。

おわらの唄の中で、先人たちは、虫たちの姿を通して繊細な情動を表現しているのかもしれない。



花がちようちようか ちようちようが花か

きてはちらちら オワラ まよわする

鳴くなこおろぎ さみしゆうてならぬ

お前一人の オワラ 秋じゃない

